

第119回 三方限古典塾（'16, 9, 15）

洪 自誠（1561～1616）「葉根譚」（その3 - 36）

1 我を以て物を転ずる者は、得も固より喜ばず、失も亦憂えず、大地も尽く逍遙に属す。物を以て我を役する者は、逆には固より憎を生じ、順にも亦愛を生じ、一毛にも便ち纏縛を生ず。 後集 94

（意識） しっかりと自己を確立して外物に支配されず、これを使いこなすような人は、物を得てもさほど喜びもしないし、物を失っても別にくよくよすることはない。この広い世界のどこにいても悠々とした態度で対処できる。

これに対して、主体性を失って外物に振り回されるような人は、逆境になると腹を立て、さりとして順境にあってもそれに執着して、毛すじほどの小さなつまらないことにも、それに束縛されて身動きができないでいる。

（余説） 外物に支配されないとは、財や名誉、他者の意見や風潮、運や不運、因習や迷信自然現象など、自分の手に負えないものに心を動かさないことです。それはなかなか難しいですが、日常においてできるだけ己を戒めることくらいはできそうです。

（参考） 無門慧開和尚著『無門関』 「春に百花有り、秋に月有り、夏に涼風有り、冬に雪有り。若し閑事の心頭に挂る無くんば、便ち是れ人間の好時節。」

（春に咲く花、夏の涼風、秋の月、冬の雪などがあるが、四季のよい面だの、よくない面だのにとられるような余計な考えごとがなければ、この世は常に極楽である。）

2 幽人の清事は、総て自適するに在り。故に酒は勸めざるを以て飲と為し、棋は争わざるを以て勝と為す。笛は無腔を以て適と為し、琴は無弦を以て高と為す。会は期約せざるを以て真率と為し、客は迎送せざるを以て担夷と為す。若し、一たび文に牽かれ迹に泥まば、便ち塵世の苦海に落ちん。 後集 96

（意識） 世俗から抜け出た人の風流は、すべて自分の心の趣くままに悠々自適することである。だから、酒はお互いに無理強いしないで楽しく飲み、囲碁は目の色変えて勝ち負けにこだわらないのが勝れている。笛は音律がないほうが本来の音にかない、琴も弦のないのが高尚である。人と会うには、前もって日時を約束しない偶然の出会いに味わいがあり、客も送り迎えをしないほうが自由で気楽である。

もしも形式にとらわれたり古い慣例にこだわったりすると、せっかくの風流なものであっても俗世間の苦しみの中に落ち込んでしまうことになる。

（余説） 小説家尾崎一雄は、老年の生き方について「気のすすまぬことはやらぬだけ」と言っていたそうです。この言葉を中野孝次は金科玉条と思うと書いています。幽人とまではいなくても人には、その年齢によってできることとできないことがあるのが事実ですから、時季相応の暮らしに徹して生きるという美意識を大切にしたいものです。

（参考） 吉田兼好・徒然草「世俗の黙しがたきに随ひてこれを必ずとせば、願ひも多く、身も苦しく、心の暇もなく、一生は雑事の小節にさへられて、空しく暮れなん。日暮れ、塗遠し。吾が生既に蹉跎たり。諸縁を放下すべき時なり。」（112段）

3 試みに、未だ生ぜらるの前に、何の象貌有りしかを思い、又、既に死すの後に、何の景色を作すかを思えば、則ち万念は灰冷し、一性寂然として、自ずから物外に超え、象の先に遊ぶべし。 後集 97

(意識) 試しに、自分が生まれる前はどんな姿形をしていたか、また自分が死んだ後には、この肉体はどのようになるかを考えてみよ。そうすれば、あらゆる雑念は火の消えた灰のように冷えて、本来の自分が静かにあらわれ、現実の相対の世界を超越して、未だ生ぜらる以前の絶対本来の世界に遊ぶことができる。

(余説) これも、もともとは禅問答の公案ですからなかなかの難解ですが、禅においては、作りものの自分ではない、本来であるがままの自分というものを座禅という修行によって見つけられると、それでやっと自分が自分の主人公になれ、楽になると教えています。

ただ、ここで菜根譚が言っているのは、自分が未だ生まれざる前は「無」であり、死んだ後の姿も「無」に帰すると言っており、これは老荘の哲学になります。

ともすると「でもねー」となりそうですが、他と比べたり、対立することを避けて本来の自分を楽しんだり、「どちらであっても」と柔軟に考えることはできそうに思います。

(参考) 禅門六祖慧能大師の公案「父母未生以前に於ける、本来の面目如何」

(お前のお父さんお母さんが生まれる以前の、お前は一体何だったんだ?)

※ 禅では本来固有で純粹無垢の自己を「本来の面目」と表現する。

4 病に遇いて後に強の宝為るを思い、乱に処りて後に平の福為るを思うは、蚤智に非ざるなり。福を俸いて先ず其の禍の本為るを知り、生を貪りて先ず其の死の因為るを知るは、其れ卓見なるかな。 後集 98

(意識) 病気になってから健康の有り難さに気づき、戦乱になってから泰平の世の有り難さが分かるようでは、将来を見通す先見の明があったとはいえない。幸福を願いながらも、その幸福が災いのもとになることを見抜き、また長生きを願い求めながらも、それが死へ通じる原因にもなることを承知している。これこそ真の見識を持った人である。

(余説) 夢を買い求めるジャンボ宝くじですが、その高額当選者を追跡調査すると、幸福どころか不幸になるケースの方がずっと多いのだそうです。不死の薬を探しに方士の徐福を日本に送ったと伝えられる秦の始皇帝も享年は48歳に過ぎませんでした。

病気や戦争、自然災害や事故などを見通すことはなかなか難しく、菜根譚が教える蚤智も卓見も多くの人にとっては期待できません。ではどうするのか。それは、きょうの一日を自分の人生のかけがえのない一コマと思って、「今、ここ」だけを命尽くして精一杯に生きることに努める。これに尽きるのではないかと考えます。

(参考) 戦国策「愚者は成事に闇く、智者は未萌に見る」

(愚者は物事が具体的な形になってもまだ気づかない。賢者は、まだ形になって現れていないうちに動きを察知して適切な対策を立てる。)

淮南子・人間訓「人間万事塞翁が馬」

(人生における幸不幸は予測しがたい。幸せが不幸に、不幸が幸せにいつ転じるかわからないのだから、安易に喜んだり悲しんだりするべきではない。)